

昭和の南海地震体験談

氏名：成川 はるゑ(なりかわ はるえ)

生年月日：昭和 5 年 2 月 4 日

地震を体験した場所：田辺市

当時の家族状況：父、母(子供の無い夫婦に、養子に來た)

本人の希望により写真は掲載していません。

1) 地震発生時の状況

当時 16 歳、家族で寝ていた。

地震で揺れて、母に起こされたが、寝惚けていて、庭に立たされ「地震やで！しっかりしいよ(しなさい)！」と言われたが、あまりに揺れるので、庭にうづくまっていた。

2) 津波来襲時の状況

私は、<地震＝津波連想>は無かった。父母が知っていたのかは不明。家のそばの、母の弟の家に小さい年子の兄弟が居たので、母が「ちょっと見てくる」と離れた。

「行かんといて！バラバラにならんといて！」と言ったが、放っていった。庭でいたら、いつの間にか父も居なくなっていた。

(私を放って、私一人にして逃げたんか)と「お母さん！」「お母さん！」と呼ぶが誰の声も、しない。しばらくすると「津波やぞー！」「逃げよー！」と浜の方から聞こえてくる。近所の山本さん姉妹に連れられ、潮に膝まで浸かりながら手を堅く握り合いながら、急流に流されそうになりながら、新道(今の国道 42 号)まで逃げる。

新道を越えたら水は、向う脛位で、駅のホームで、父と再会、「お母ちゃんは？」と父に聞かれ「私ら最後やった、誰も居らんかった(居なかった)！」と言うと、「そんな事ある訳ない、はるゑ、放って逃げるなんて事」と言いながら、一緒に「呼び上げ地蔵」(右 写真)まで逃げた。

「呼び上げ地蔵」も人が一杯で、「お母ちゃん！お母ちゃん！」と捜すが居ない。その山のまだ、上の山にもたくさんの方が逃げて来ていたので捜して回るが居ない。母が「見にいつてくる」と、行ってしまった、その、弟さん家族も見つからない。夜が明けるが、山からは降りられず、いくつもの山に大勢の人が逃げていたのを捜す。

潮が引いてから、下に降りて捜索に行く人たちに、母のことを頼んだ。

<写真：現在の駅前の様子>



3) 家族の行動・被害

家族 3 人全員、バラバラになった。父とは駅のホームで再会。母は行方不明。

4) 集落・周囲の被害

惨状と言う言葉がぴったりくる位、酷い状態。

家も、周囲同様、めっちゃめちゃになっていたし、布団も畳も駄目になった。

父が、大工だったので、父が、直したのだと思う。



<名切りの惨状:新庄公民館提供>

5) 地震・津波後の生活

父と二人、実家(はるゑさんの生家)で世話になる。

時間の経過と共に、段々と津波の被害や状況がわかってきて、死体が上がるたびに連絡を受けては、父と二人で、母じゃないかと確認に行くがどれも違う。

母の兄弟 8 人もずっと共に捜索してくれた。正月越しても見つからない。

正月は実家で年を越した。そして、一ヵ月後、元の中学校のところで、流出した家の瓦礫を片付けている人が、母を発見。知らせを受けて行くと、水も飲んでいないし、水に長く浸かっていたからか、手の先が真っ白で砕けていた様だったが、顔はそのまま、一目見て母とわかった。

母が、一番、最終の遺体だった。それまで、知らせを受けて遺体の確認に行く度、母の顔の右頬の黒子を、目印にと捜したこと。「歯でわかる」と聞けば、死体の口を広げて見たが、大概の方は、“グチャグチャ”になっていて、わからなかったことなど思い出した。

それで、母を家まで連れて来て貰って、家族や兄弟で母をきれいにした。そこまでは覚えていいる。そこから先は泣き崩れて知らない、覚えなし。葬式も簡単に家でした。埋葬は土葬。

泣き崩れてからは、「死にたい、何処で死のう」ばかり考えて、口を開けば「死にたい」で父は参っていたのだろう。

何時、実家から戻ったのか、学校にも何時から行ったのか覚えていない。

夜も死に場所を探して、家を出てまわりしたので、本当に父を困らせた。

それまでが、ご飯事(炊事、家事)など一切したことが無い、大切に、大切に育てられたので、実家から戻った当初、実家の祖母(実の祖母)が三人で一緒に住んでくれて、炊事などしてくれたのだが、しばらくして、父が、「祖母に来て貰っても、大工の仕事がないし、母が取りに戻ったという書類や、金も発見されずで、祖母の食べる分まで出来ない」と言う事で、「はるゑ、ここから踏ん切りつけて(覚悟決めて)、何時までも祖母に、頼って(ばかりい)られん、祖母に帰ってもらえ！」と言って、私は、頼る人が無いまま、引き離された。

「お祖母さんに居って欲しいんや!居って欲しいんや!」と泣いても、父が引き離した。

この地震で、人生が変わった。わからぬまま、流された。ただ、母が見に行った、弟の嫁さんが、良い人で、食事の世話から、支度を教わり、それがたった一つの救いだった。

その後、何年か後に「生きらねば」と変わっていった。

母と一緒に駅のホームまで逃げていた人が、「家の二階の筆筒の上に忘れもの(家の大切な書類・金)した」と、制止を振り切って、戻る母の姿を見ていた。

6) 次の災害への備え

ご近所の人が、目の不自由なお母さんを背中に背負い、病弱な姉と三人の子を連れた奥さんらに「皆揃っているか?」と声を掛けあって逃げていく姿に、「こんな時(有事の時)は、家族一団となって逃げなければならないなあ」と痛切に感じた時があった。